

地球

第二卷第四號

大正十三年十月

戰場としての支那の地勢に就いて(一)

小川 琢 治

支那といふ國が古代から文獻を完全に保存し來つた點で世界何れの文化民族にも優越してゐることとは言ふまでもない。我々漢文を解するものには此の文獻が種々の方面の歴史的研究に當つて役立つのであるが、不幸にして此の貴重な資料を基礎とした支那の地理研究は案外に少ないやうである。

何故に現今の日本の學者が支那の文獻を忽諸に附してゐるかといふに、それは主として何時も引合に出される白髮三千丈の形容詞を楯として、詩人の醉中に卷く管の誇張を以て、漢文で書かれたあらゆる文書の價值を批判するもので、太白をして地下に苦笑せしむるのみならず、眞面目に畢生の心力を傾注した無數の學者もそれでは地下に瞑することが出來まいと想はれる。

然れども此外にまだ日本の學者で多少漢文の素養のあるものにも支那の材料を科學的に使ひこなし得ない理由がある。それは我々の學んだ所の漢文の教科書たる經史子集の四部共に之を教へる學者すらその文句に含まれた現實的の意義を解釋し得ぬ所が多く、唯だ文字の解釋だけで既に一生を費すに足り、活眼を開いて活書を読む方針を學生に吹き込み得ない。従つて現在の高等教育を受けた科學者に指を鼎に染めしめる様に導き得ないのも敢て怪むに足らぬ。

地理に關する支那の文獻を紹介することは本篇の目的でないが、淺薄ながら我々の從來此の方面の研究を試みた所から概括すれば、我々が支那の地理書を通して地勢交通等の地方誌上の智識を獲るのに戦争の經過を辿る一途が最も良いといふことであつた。支那の地誌中に於て清初顧祖禹の編纂した讀史方輿紀要の一書が明清の一統志に優つた有用の地理書たることは東洋史を學ぶものゝ周知する所であつて、其の歴史に及ぼした地理特に地勢の効果を犀利なる史眼で論斷したのは實に面白いのである。

私の初めて支那地誌に指を染めたのは在學中に臺灣諸嶋誌を編纂した時で、參考書として此の方輿紀要、臺灣府志等を參考したが、故島田博士の門を叩いて一謁を乞ひ、快く引見せられて學殖が該博で識見の透徹した先生の口からも、此等の諸書の第一等の史料たるを説明されて、會心を覺えたと同時に支那地誌の價值判斷の確信を増した。

明治四十四年支那革命の烽火が武昌に起つた時に一文を草して當時の太陽誌上に公にしたのも、此等の地誌と支那歷代の史書から平生有した意見の一端を述べたに止り、敢て清朝の末路を豫言した譯でなかつた。當時の愚見は次に重複を厭はず略述する如く、漢口武昌が北京南京と共に三角形の隅角に當り、大平野といふ大廣間の一角で揚子江といふ廊下を通して西は背面に湖南雲貴や四川に通じ、又た東は南京上海といふ一大厦屋と見た支那の表裏關に通ずるもので、此處が火元たる出火は頗る重大な意義があると考へたのである。袁世凱が戈を倒にして清室を覆したことは全く豫想せなうだが、此の一般的判斷は中らなくとも遠くはなかつた。

此の後十餘年に亘り民國政府の名あつて實は唐朝藩鎮の跋扈にも増した不統一の形勢が繼續しつゝあつたのが、今回突然江蘇浙江兩督軍の間に戰端が開かれ、又た奉天直隸兩督軍の間にも彌決裂して一昨年失敗した張作霖が背面から再び北京を衝いて會稽の耻を雪がんとする形勢となつた。走馬燈の如く轉移する形勢は各省督軍の向背全く不明である上に列國の環視干涉又は援助といふ厄介な關係もあつて、其の變化は何人も逆睹し豫料し難いのであるから、我々は再び車を下つて虎を搏たんごる馮婦の愚を學ばんとせぬ。然れども此の際は戰略地理學上から支那を理會する好機で讀者の注意を惹くに足ると思ふから、簡單に支那に起る戰爭に對して地理的要因が過去に於て如何に働いたかを述べて、他の要因が加はらぬ場合を考へて見る。

二

支那のことを論ずるに當つて常に北支那と南支那を對立させるが、此の區別は秦嶺及び岷山即ち東崑崙山脈の分水嶺のある内部に於て判然たるも、是より東では揚子江と黄河の流域の中間に淮河といふものがあつて是と揚子江との分水界たる淮陰即ち淮南の山地は著しい連續した山脈がないので、南北を區別することは困難である。之に反して北京漢口と揚子江口に近い鎮江の邊とを結んだ鋭尖な等脚三角形の地域は大體に於て中央の大平野地區と看做し得べく、揚子江が其の底邊を成し江北に今述べた淮陰の山地があつても、それは中央の大廣間が入側附になつて敷居一つで隔てた位の關係を成すに過ぎぬ。

今の京漢鐵道線は略ぼ西側の一腳邊に沿ふもので、其の二等分點に近い處が山西河南に連亙する大行嵩山の大きな地壘の間を破つて黄河の大平野に出る地點であつて、此の河谷は西方に通する長廊下を成し、其の奥に河曲と渭水とによて圍まれた南北に長い陝西鄂爾圖斯オルドスの一區が奥座敷の形を成し、昔の鎬京、咸陽、長安といふ首府即ち今の西安が此の兩河の合流點を支配する處を占めて天下に號令した。然れども三、四百軒もある山地を隔てゝゐるので、現今以上に交通機關に乏しい時代では長鞭馬腹に及ばぬ不便を感じたのは當然であつた。故に周代に於て既に此の廊下の半途に在る伊洛雨水の合流點に近い洛陽を第二の首都として萬國諸侯を此處に會同せしめ、犬戎の侵入を受けて

幽王が驪山で殺された後に更に此の時々出張する應接室へ引移つたのが周の東遷で、秦が周に代り漢が更に之に代つて統一した時に同じく咸陽長安を首府とし、政治上と同時に經濟上の中心とせんとして天下の富豪を此處に集めんと試みたが、中央政府が強力の英主を失へば中原に叛徒が蜂起して兵力で之を撃破することが出來ずに破滅する外なかつた。

此の周の東遷を餘儀なくした原因は歴史には單に幽王が暴君で褒姒に惑溺して終に犬戎に襲はれたことになつてゐるが、私の支那地震史を調べた處では幽王の二年に西周三川（涇渭洛三水の流域）に大地震があつて、伯陽父といふ先見の人が周は將さに亡んとすと豫言した位に激烈を極めた。是は恐らくは一九二〇年の甘肅地震よりも遙かに大きく、嘉靖三十四年（一五五五年）の山西陝西河南三省に跨る者と匹敵する支那最大の地震であつたらうと想はれる。従つて其後九年にして犬戎の侵入したのは此の奥座敷の大破壊に乗じた強盜の如きもので、儒家は其の原因を只女色のみに歸してゐるが實は幽王が其復舊に努力せずにあつた罪を免れぬので、褒姒は或は二千餘年間過大の冤罪か艶罪かを被つてゐるのかも知れぬ。此事は本年一月の藝文誌上に詳載したが、大地震によつて國防が根本から破壊される一例として、我々地震國民の警戒すべき所であると信するから序に一言する。

今直隸側の重鎮たる吳佩孚の據る河南府洛陽は古代から此の如き位置を占むる處で、若し戰術が三百餘年前の如く主として人馬糧秣を軍資として、新しい武器と彈藥動力を要せぬならば、又た

若し涇渭洛と汾水(山西)の流域全部を背面の領土としたならば、兩漢六朝の間に常に天下を統一した形勝の地區たる從來の徑路に従つて未來の歴史を作るかも知れぬ。

然れども最近の戰爭に要する材料は蘇秦のいつた韓の鐵で秦の甲を研るといふ如き簡單なものでなく、歐洲戰爭に於て行はれた如く工場を動員して軍資の供給を充すやうに支那内地の工業が進むまでは河南の秋色を飾る雪の如き棉花から爆藥を製造する事も、大平野西邊の地壘を構成する石炭紀岩層中の石炭と鐵礦から特種鋼を精煉することも出来ぬ。此等の材料の一部は現状では漢陽製鐵所に仰げる譯で、三國鼎立當時の一櫛の美味であつた荊州即ち今の湖北の首府武昌漢口漢陽の三子都會に過去の地勢上の意義と全く異つた戰略上の意義が生じてゐるのは面白い。吳將軍が志を得るには湖北と直隸兩省を左右の手の如く自由に使へるか否かを知らぬが、恐らくは近年の如く外資輸入の途が杜絶して、新しい鑛工業の企圖が興らぬ現状に於ては是も餘り多くは期待し得られまい。此の結果は今回の戰爭に於て奉天浙江兩軍に對して内線作戰の便益を有する直隸軍側に在つて、金力以外に豊富な物資供給の途の開けた敵軍に對し著しく不利である。故に山東督軍をも自由に願使し得て青島の門戸からも供給を取らねばならぬ。

尙ほ此處に一言せねばならぬは洛陽及び開封の兩古首都の交通上の地理關係である。隋の洛陽宋の開封が首都として存立した時代には今の淤黃河と並走する汴河の水運が非常に漕運用に役立つた

もので、楊州に集まる江南の物資を首都に運んだ幹線であつた。今之に代るものが南京の對岸浦口に通ずる津浦線と海蘭線の兩線で之を連絡して洛陽の西まで交通の一大動脈となつてゐるのである。河南軍が馬を吳山第一峰に立て得るとすれば此の幹線が陝西山西の諸師團を運んだ時であるかと想像され、南京に前進根據地を有する現状は曹操や符堅をして地下に垂涎に堪へざらしめるものがある譯である。

内線作戰に於ける直隸軍の便益は此の如く、白國の手から回收した京漢線と海蘭線とがある外に、之に加ふるに天津から浦口に通ずる津浦線とて第二の脚邊に沿ふた幹線がある。青島からの物資も此の線上の濟南に集まる處で、山東省は宛かも大廣間の東に附隨した小玄關を持つた側室の位置を占め、直隸軍の南京集中には最も重要な交通線である。周代に於て齊桓公が五霸の首となつたのは其封土の東を開いて卽墨即ち今の青島や琅琊を海港として海上交通による經濟上の地位が他の諸侯に優越したに在つて、此の後南に吳越楚が次第に勃興し、六國となつても齊は常に東方の強國たる地位を占めてゐた。秦末以後天下の亂世になる毎に山東に割據する豪傑が出て天下を争はんとしたのは此の地理的位置が基礎を成すのである。而して永い歷史上に江淮の間に漢の高祖明の大祖の如き天下統一の英主を成したのに反して、此處からは桓公以後に中原の鹿を獲た例を見ないのも事實で、それは背面に廣い領土を開拓し得ない、何處までも小玄關に續いた側室たる以上の資格がな

いといふ缺點があるからであらうと思はれる。

従つて山東は統一運動を幫助する有力なる一勢力となるのは勿論であるが、南北兩側が之を手に入れると否とによつて屢勢力の均衡を左右するに足るものはあつても、其の運動の盟主とはなり得ないであらう。(未完)

夫秦七國之雄也、韓秦魏之門戶也、魏山東之要、天下之脊也、趙河北之強國也、燕附齊趙、以爲重者也、齊東海之表也、楚南服之勁也、秦用范雎遠交近攻之策、先滅韓、次滅趙、次滅魏、次滅楚、次滅燕、并滅代、乃滅齊、於是罷侯置守、分天下爲三十六郡、又平百越置四郡、始皇旣沒、山東之衆起而亡秦、

項羽還自咸陽、分王諸將、楚爲四、趙分爲二、齊分爲三、燕分爲二、魏分爲二、韓分爲二、秦分爲三、并漢中爲四、漢還定三秦、遂東向而爭天下、堅守成臯、卒平強楚、天下大定、定都長安、

顧祖禹讀史方輿紀要卷一、二